

学位論文の要旨

近代日本における「岡田式静坐法」の身体芸術論 —重力と癒し—

広島大学大学院総合科学研究科
総合科学専攻
学生番号 D150499
氏 名 片山 俊宏

「岡田式静坐法」（以下静坐法）は明治期に岡田虎二郎が考案した身心療法である。姿勢の習得を通して感覚を変容させ、精神的健康を図ることを目的としている。

肝心の姿勢構造について疑問を呈する医学者は少なくなかった。正坐の様に、重心を落とし、膝を折り曲げ、脚を床に密着させて坐ることを原則としていたからである。物理学的には、重力負担の増大を招き、自らの体重で内臓・神経を圧迫させることとなる。しかし静坐者の間では、その治癒効果が高く評価され、大正期には大流行した。静坐法は、重力負担を逆利用していたことになる。

この謎について解明を試みた研究は皆無に等しい。しかし、日本的身体観のキーワードでもある臍下丹田（以下丹田）に中心感覚・意識を創造することに長けた方法論として支持されていたことは報告されている。本発表ではこの視点を踏まえながら、先の謎について美学的に解明する。それは、日本ひいては東洋の伝統的な身体論に触れることにもなる。また、人間の身体と心における重力の意義について検討することにもなる。研究対象は、明治・大正期に活躍した創始者・岡田虎二郎と愛弟子である岸本能武太や、その他の弟子達の活動に焦点を当てる。

第1章「静坐法の律動と中心運動」では、静坐法の身体技法について考察している。静坐法が、脚を床に密着させることを原則としたのは、反作用を下半身に伝達させるためであった。反作用とは、物体の重さに比例して持ち上がる上昇力を、床に重さを加えることで働かせる反動原理のことである。重心を落とし、重みを地面に加えることで下半身に上昇力が生まれる。上半身は弾み、その分勢いよく下降する。再び下半身に上昇力が生まれる。下降・上昇の循環運動が形成生まれる。この時、身体の中央に位置する丹田には中心感覚・意識が生まれる。そこを中心として、循環運動が上下の身体空間を均一・均等に満たしていくことが感じられる。その循環運動は、呼吸や脈拍・鼓動のリズムと連動して感じられる。上下に分離していた上・下半身は、代謝の秩序を活性化させる循環運動体として、統合されることが感じられる。

第2章「万物の中心運動—天地の律動—」では、静坐法の知覚の変容について考察して

いる。このパフォーマンスの発揮に成功した時、下半身は地面と一体化するほど密着することに成功している次元に入っている。大地との境界が感じられなくなっている。一方、上半身は、空中に漂う風の如く、下半身に起こしあげられる受動性を発揮させている次元に入っている。天との境界が感じられなくなっている。丹田の中心感覚・意識は、天地空間をも陰陽一如の循環運動として結びつける。肉体の代謝の秩序が、万物を育む天地陰陽の秩序そのものとなる。この時、自己の肉体は、その様な天地陰陽の秩序を体現する柱ないし樹木となる。それは、肉体の代謝の秩序が、万物を育む天地の秩序となり、生命の永遠の安定を実感することを意味する。

第3章「静坐法の受容過程に関する考察—雑誌『静坐』を通して」は、近代日本に於ける岡田式静坐法の受容の背景を、文献学的に検証・考察する。体内外の二重の空間において、感覚的・精神的な、混沌・混乱を抱えて生きたことを指摘する。医学の発展は、内臓構造の複雑さを民衆に提示し、呼吸や血液の流れがいかにも不規則で、いつ痛みや病気が発祥するかわからないという体内時空の混沌・混乱を表象した。科学、政治システム、思想の発展は、公害病、暴動、戦争、テロなどの人的・自然災害が、人間の予測を超えて、いつ発生するかたわからないという、体外時空の混沌・混乱を表象した。静坐者達は、この二重の時空に対して、孤独・恐怖・怒り・悲しみといった情念を抱いて生きていたことを報告した。

第4章「身心療法としての浄化の表象—「激動」の時代のなかで」では、静坐法の中心運動が、如上で触れた困難に直面するなかで、身心を根本から支える力として位置づけられていたことを報告した。静坐法の律動の中心運動を経て、主体は、混沌・混乱の覆われていたかのようにみえた世界が、実は統一・調和へと向かっていたことを悟る。恐怖や孤独、怒りは「浄化」されることとなる。静坐法は精神療法と称されたのは、この「浄化」の表象を民衆に与え身心を救済していたことを報告した。

第5章「重力・下半身・内圧感覚の「発見」の表象—大地からの離脱のなかで」では、静坐法が明治・大正期に流行した意味を、身体感覚の歴史的変容の観点から再度検討した。この時代は鉄道が輸入され、日本史上はじめて重心が浮遊する体験をもたらした。近世以前では、大地に足を踏みしめて反作用を得る感覚・技法の反問が、精神に高揚をもたらす技法として発展していた。そして、結果的に、乗車体験は身心の重心を殺す感覚として、民衆に齟齬を感じさせるものとなった。重力の回復が、静坐法のもうひとつの流行過程であったことを報告した。

以上を踏まえ結論では、以下を報告する結果となった。静坐法は、自らの身体ひいては世界そのものを律動化させ、自己と天地万物をひとつの中心運動系へと音楽的に調和・統一させる。そして身心に深い調和を与えていた。低級感覚にすら位置づけられず、精神的価値が与えられてこなかった、内圧感覚が、いかに知覚的な変容を起こし、人間の精神を中心運動という「アイデア」（浅野晃「思想の姿勢」『静坐』一五卷二号）へと導く、高次の感覚であるかを報告する結果となった。そしてそれは、大地・重力・下半身を基盤として

いたことを明らかにした。本稿では、中心運動感覚がいかに人間の身心を支えてきたかを報告する結果となっている。しかし、躍動し上昇性にも富む中心の運動リズムは、重さを介して体現されていたのである。この身体論は、西洋では今日まであまり確認されてこなかったように思われる。この意味で、一連の結論内容は、日本ひいては東洋の身体美学論の一端に触れている可能性を有している。